

北湖主要漁場におけるゴリ資源の現況把握調査 (2022 年)

大前信輔・佐々木賀治

1. 目的

ハゼ科稚魚である“ゴリ（ウロリ）”は琵琶湖の重要な水産資源の一つである。そこで、漁場での生息状況を評価することを目的として調査を行った。

2. 方法

2022年7月21日、8月23日および9月16日に高島市大溝地先、大津市真野地先、近江八幡市長命寺地先、彦根市薩摩地先および松原地先の水深約8mでビームトロール網（ビーム長3m、袋網目合1.4mm）による採集調査を行った。なお、真野での7月の調査が欠測となった。曳網時間は6分、曳網速度は約1.5km/hとした。また、携帯型GPSにて曳網開始地点と終了地点を記録した。採集したサンプルは現場にて10%ホルマリンで固定して試験場に持ち帰った。概ね体長20mmまでのハゼ科稚魚をゴリとして計数した。携帯型GPSの記録から曳網距離を計測し、曳網距離にビーム長を乗じて曳網面積を算出し生息密度を求めた。

3. 結果

調査結果を図1に示す。長命寺地先と松原地先のゴリ生息密度の推移は類似した。長命寺地先の生息密度は7月から8月にかけて横ばいであったが9月に3.0尾/m²に増加した。3回の調査の平均生息密度は5地点で最低値であった。松原地先の生息密度は7月から8月にかけて横ばいであったが9月に7.5尾/m²に増加した。

薩摩地先の平均生息密度は5地点で最高値であった。しかし、月毎の生息密度のばらつきが大きく、7月は全調査結果で最低値、9月は全調査結果で最大値となった。

真野地先の生息密度は9月が8月を上回っ

た。

大溝地先の生息密度の推移は他地点と異なり、7月から9月にかけて横ばいで推移し平均密度は2.7尾/m²であった。

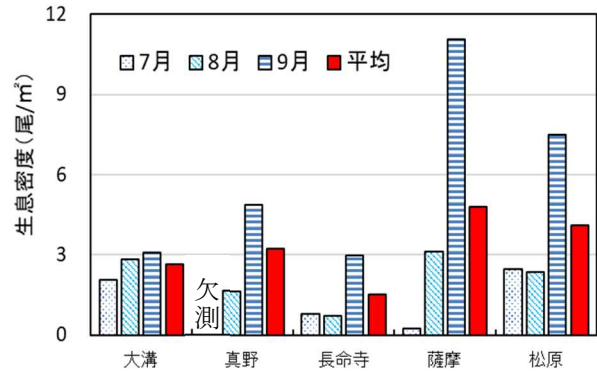


図1 地点別の月別生息密度と平均生息密度

月別の全地点平均生息密度合計値を図2に示す。全体的な傾向として7月以降増加し、9月に最高値となった。

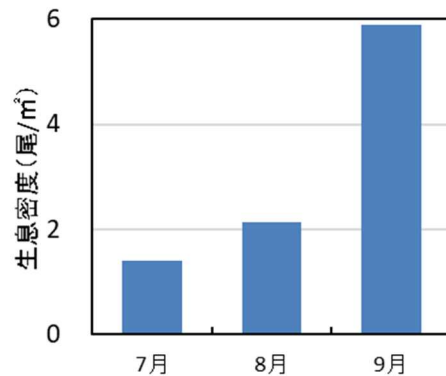


図2 月別の全地点平均生息密度合計値

これまでの調査データの有用性を評価するため、次年度は努力量当たり漁獲量との関係について調べる予定である。